

持続可能な社会を、ともに目指して

都市と山村の やさしい共生



おいでん!
山村



ミライを変える! 多様なチャレンジをサポート

過疎、災害、生活の多様化といった課題を解決する「共生」への挑戦

豊田市は都市と山村の両方を抱えるまちであり、市域の7割が森林であることから、「日本の縮図」とも言えます。都市と山村が抱える課題を、お互いの交流によって解決するため、「おいでん・さんそんセンター」を中心に、民間を主体とした都市と山村の活発な交流を展開。新しい価値を創造しつつ、着実に成果をあげています。



CHECK
Point!

おいでん・さんそんセンター
鈴木 辰吉さんに
聞きました!



元豊田市職員で、同センターの立役者。平成25年に開設した同センターは、「人と人、まちといなか、地域と企業をつなぐ」役割を担っている。

支えあう、助けあえる社会を実現するために 市民が主役になれる土台づくりを行政がサポート

私が豊田市職員だった平成12年に起きた東海豪雨が山村の重要性を知るきっかけでした。矢作川が増水し、市街地も浸水の危機に直面。原因の一つに上流部の森林が荒れていることが挙げられ、健全な森づくりが喫緊の課題でした。平成17年に6町村と合併して以来、山村振興のための様々な取組を行いました。平成25年には、そうした取組に加え、既存の住民活動をより活発化させ、新しい交流や活動を巻き起こすサポートが必要と考え、「おいでん・さんそんセンター」を立ち上げました。山村のみで解決を図るのではなく、都市と山村がそれぞれの強みを活か合い弱みを補うことで、支え合って豊かになる社会を目指していることが特徴です。



いなかとまちの交流の、無限の可能性

多様な暮らしができ、未来への研究の場にもなる

山村部は、人口減少・高齢化、空き家、耕作放棄地など、未来の日本の課題を先取りしています。これらの課題を解決して持続可能な地域をつくるため、平成30年に、地



元企業や自治区、大学、豊田市などが連携し、「つどう、はたらく、つくる拠点つクラッセル」が廃校活用により開設されました。ここでは、山村における高齢者の移動について調査研究する「里モビ互助会」や間伐材を利用したものづくり、情報通信技術を生かしたテレワークなどが取り組まれています。学生のインターンや体験事業、県外や海外からの視察研修も多く、未来への研究の場にもなっています。

当センターがコーディネート役として、「信頼と情報と場所」を提供することで、多彩な民間活動がどんどん展開しています。民間の活力を上手く取り入れ、地域課題を解決する手法が成果をあげ始めており、もしかしたら「未来の行政のあるべき姿」が当センターかもしれないと感じつつあります。

CHECK Point!

「都市」と「山村」それぞれの強みを活かす

いなかとまちの、個人や団体、企業をコーディネート

例えば、企業の社員研修として耕作放棄地での農作業を提案。参加企業から管理費をいただき、普段は地元の農家が管理することで地域に収入と働く場をもたらします。企業側は通常の社員研修にはない成果を得ていて好評です。まちの企業には社会貢献の実現や福利厚生充実などのニーズがある一方で、個人では「週末だけいなかで過ごしたい」、「子どもに農業体験をさせたい」、「いなかに移住したい」といったニーズもたくさんあります。そうしたまちの潜在的なニーズを掘り起こし、いなかのニーズとマッチングさせることで、耕作放棄地や空き家といった諸問題の解決に結びついています。



いなかとまちのくるま座ミーティング

おいでん・さんそんセンターは、NPOや大学などの様々な民間団体と連携して活動を行っています。いなかとまちのくるま座ミーティングでは、そうした活動の報告も踏まえ、参加者がくるま座になって豊田市ならではの持続可能な地域づくりについて考えます。

おいでん・さんそんセンタースタッフのおすすめ見どころピックアップ!



里山くらし体験館 すぎの里



太陽光発電・地中熱利用・間伐材を利用した薪ボイラーなど自然エネルギーを導入した先駆的な公共施設。宿泊もでき、様々な里山暮らしの体験拠点として利用できます。

旭木の駅プロジェクト



山に放置された間伐材を「木の駅」へ搬出し、チップや薪として有効活用します。また、搬出した間伐材の対価として、旭地区内の商店で使える地域通貨「モリ券」を発行するなど、皆で地域を支えています。

CHECK Point!

豊田のしっかり田舎でつながる暮らしのストーリー「脈々と」

中山間地域に暮らしながら地域課題の解決と活性化に取り組むために採用された豊田市職員6人が、移住者の視点で田舎の生き物、伝統文化、伝説、食など田舎の魅力や意外な一面について地域住民に取材してまとめました。

地域スモールビジネス研究会

山村に・Uターンした30代~40代のメンバーが結成。

山村の暮らしをベースに、多様なビジネスを組み合わせて生計を立てていくための小さな仕事や多様な暮らしについて研究しています。



Friendly coexistence between urban and rural areas

Oiden Sanson Center connecting the two areas

Since 70% of the city is forested, its landscape is described as "a miniature version of Japan." Oiden Sanson Center was established to promote communication between residents of the urban and rural areas as a means of solving problems, as well as to create a collaborative and cooperative society. The Center coordinates links between individuals, organizations, and businesses to benefit from their strengths, introduces new values to each party, and helps find solutions to issues like the shortage of people to carry on agriculture and forest industries. Such example includes utilizing abandoned farmland as a corporate training center and helping a university and a hospital collaborate in providing transportation to elderly citizens. It also works together with various local projects related to the Center's activities such as the Asahi Wood Station Project, which promotes effective utilization of timber from forest thinning, and the Local Small Business Laboratory, a group that promotes small businesses in village life. As the Center enjoys increasing success in utilizing the citizens' abilities to find solutions to their problems, it seems that possibilities of an ideal future local government exist here.

※掲載内容は2020年3月現在のものです

